もあって、懇意にしていただいている。

先生は実に純粋な人である。真っ直ぐな人である。『論語』に「剛毅」という言葉があるが、孔子の想定している人物は先生のような人ではないかと思う程である。私などはなかなかそうはいかない。思わず人の思わくを忖度したりしてしまう。私は私と性格の違う上田先生とずっと僚友であり続けられたということは、私の人生にとって大きな意味を持つものであったと、しみじみと述懐している。先生より一足先に退職した私は、今故山に居て「蘿によりて南山を見る」日常を志向している。職を辞して初めて見えてくるものもあるように思う。

先生も御元気で豊かなこれからを御過ごしくださるものと、確信しています。

「有朋自遠方来、不亦楽乎」とは、これからの願いである。

「何も何も尽くし難くてとどめ候ひぬ」という恵信尼の消息の一節をもって、この雑文の結びとしたい。

如月中旬に　　於草居爾庵

私事を述べて恐縮であるが、私と先生との関わりを敷衍して以って、先生の多くの人に与えた影響の一端に触れてみよう。

先に海外交流を盛んにして英文学科の学生の英語力の向上を図った旨を述べた。それまで英文は時間をかければ読めるが、会話は苦手であるというのが、一般的であった。現に今教職に就いている多くの先生においても、「英文学を研究しているので、会話を勉強しているわけではない」と考えている人がいるやに仄聞している。が、はたしてそうでろうか。「語学の勉強は同時進行でなくてはならない」というのが、先生の持論であった。私もそう思うようになった。そう思っている折、二人の共通の友人である日大の栗栖真人先生がベルギーに滞在しているとの連絡を受けたので、上田先生に頼んで一緒にロンドン・パリ・ローマを経由して、私にとっては初めての海外旅行に出かけた。その折上田先生の卓越した実力に触れ、剋目した私は、おおけなくも、英語の必要性を切実に認識して、「アメリカ口語教本」で英語に取り組んだが、結局大成しなかった。ただ旅行用の英会話とそれを使う時の自信を培った。そのことが後に国文学科の学生を引率して、イギリスに行き、夏目漱石の留学の足跡を訪ねたりする活動の基礎になった。また、それ以後留学生募集や入試で頻繁に韓国・中国に行くことになるが、その折に特別負担を感じなかったのも、一重に上田先生との出会いによることが関わっていると振り返っている。その結果最後には、蛇足であるが、韓国各地を訪ねても釜山のロッテホテルに帰ってくると、我が家の如き安心感を得るようになってしまったのである。

結局、英語はものにならなかったが、先生は、鈴木大拙先生の講義の例を引用して「英語をうまく話せるとか話せないとかいう事が、大切ではない。要は何を話すかという内容の問題である」。鈴木先生は英語力は勿論だが、その内容に聴衆が感動したのだと、逸話を語ってくれた。成程うべなるかなである。さすれば、人格の陶冶に邁進するしかないのであるが、これが又難題である。が、そのことがわかっただけでも了としたい。

最後になったが先生のひととなりについて述べよう。

前述したように私は、同時期に別府大学に入ったこと

先ず、特筆すべきは、当時としては全国的にも斬新であった海外交流。ハワイ大学との姉妹校の締結。それに伴う学生の夏季留学制度。これは交換でなされて先方からも、学生が本学を訪れ、日本文化に触れ交流を深めた。その制度は拡充され、イギリスの大学に一年間留学するという形になり、今日に及んでいる。ＬＬ教室の充実などによって齎された「活きた英語」の教育の成果であろうと門外漢でも思う。考えてみると、私どもは、普通六年間は英語の勉強をしているわけであるが、なかなか実用にならない。それだけに、その制度は私自身は斬新でかつ画期的に思えた。現在では当然のことになっているが、その当時率先してそれを成した事の意義は特筆すべきであろう。余談であるが、国文学科の学生も無理に頼んで何人か、ハワイ大学の夏季セミナーに参加させて頂いたことを、この文を書きながら、ふと思い出した。

奉職した当時は、組織が拡充されていないということもあって、大学院を修了したりして、すぐに別府大学に入り、定年まで在職するという人が甚だ少なかった。上田先生と私が同時に入ったので話題になっていたということを、ずっと後になって知った。そういう意味からしても先生は二十代後半から別府大学で教鞭をとり続けて定年を迎えた、英文学科の最初の人ではないだろうかと、改めて思うのである。

次に学科長としての先生について触れることは必須である。三十八年の内何年間学科長をなさっていたか。はっきりとは知らない。が、おそらく、在職期間の三分の二位はその席にあったのではなかろうか。いや、もっとかもしれない。ようはそれ程左様にその重責を果たし続けたのである。学生の募集・教育・指導等多岐にわたる仕事を中心になってこなしておられた。なかなか「余人を以ては代え難い」の感がする。本当に御疲れでしたと改めて労いたい。同時に他学科の事ではあるが、先生の退任の後が思われる。

文学は人間の人間たる根幹の営為である

というのが、私の考えである。その点から言うと、実学に逸る現況は憂うべき事象に他ならない。「余算を山の端に見る」思いであり、先生の退任がそのことに拍車をかけないようにと念じるばかりである。

僚友上田見二先生のこと

安東大隆

今般、英文学科の上田見二先生が定年により、別府大学を退かれることになったよしである。万感の思いを記して長年の友誼に報いたいと思う。

思い返せば、先生は昭和四十九年に学修了の後、別府大学英文学科に赴任してこられた。爾来三十八年が経過していることになる。私事ではあるが、私も同時期に国文学科に職を得た。言わば同期の間である。そういうこともあってか公私に亙って御世話になった。

先生の赴任した時の別府大学は、

真理はわれらを自由にする

という建学の精神が随所に確認された。昭和五十三年に『別府大学の三十年』と題した記念誌が発行されていることからしても、未だ新進の気が溌剌と充満しているような大学であった。

そして、又、事あるごとに

本学は日本で一番小さい大学である

文学部だけの単科大学である

と喧伝していた。奉職してすぐそういう理念に触れた私は、それを継承していこうと思ったものであった。確認したわけではないが、おそらく上田先生も認識を同じくしたのではないだろうか。今考えてみても、「真理はわれらを自由にする」という理念は文学部の上にのみ存立するもののように思う。

奉職してまもなくして学生数が飛躍的に増加していった。だんだんと小さい大学という意識が遠のいて行ったのもその頃からかと思っている。

英文学科で先生の為した事と言えば、文字通り枚挙に暇があるまい。